

遊び中心の保育への変革は保育者に何をもたらしたのか

— 保育観の変容プロセスと心の揺れ —

松 延 毅

要 旨

本研究では、遊び中心の保育に保育内容を変革したことにより、保育者の保育観がどのように変容していったのかについて、半構造化インタビューによって得られた保育者の言語データを基にグラウンデッド・セオリー・アプローチを用いてそのプロセスを明らかにした。保育者の保育観の変容について、保育者は保育内容に伴って生じている保育環境や援助、子どもたちの姿から自身の保育観を形成していることが示され、その中では悩み立ち止まりながらも、子どもの姿を捉えることの重要性和、やりがいを感じていることが示された。

1. 問 題

(1) 保育の中での遊びの位置づけ

幼児期の教育や保育は、遊びを通した総合的なものであることが大切といわれている。幼稚園教育要領解説ⁱや保育所保育指針解説書ⁱⁱ、幼保連携認定こども園教育・保育要領解説においてもⁱⁱⁱ、乳幼児期は子どもの自発的な活動である遊びがこの時期特有の学習だと示し、日常の保育においても遊びを保育の中心に据えることを述べている。また丸山(2003)^{iv}は遊びを通して発達する能力として①身体運動能力の発達、②認知発達、③コミュニケーションの発達、④社会性の発達、⑤情緒感情の発達、⑥自己の発達、⑦想像力の発達を挙げ、心身の諸側面の発達が促されることを示し、乳幼児期の遊びの重要性を説いている。また小田・中坪(2009)^vは遊びに個人や集団の能力を高める機能がある一方で「遊び本来の自発性や主体性は見失われ、遊びそのものの面白さを追求しようとする視点が置き去りにされてしまう危険性」に触れ、保育者主導の遊びや保育への疑問も投げかけている。鯨岡(2015)^{vi}は一斉型課題活動と、遊び中心の保育でのそれぞれについて、その特徴を示している。一斉型課題活動においてはその内容の幅を認めたくえで、「画一的な保育は画一的な結果しか導かない」としている。一方の遊び中心の保育では保育者の援助の重要性に触れつつ、「子どもが自由に遊びを見つけることも、大人に干渉されずに自分なりの発想をとことん追求することも、子どもが自由な遊びを通して自己効力感を育むうえ

に大事なこと」と述べ、遊び中心の保育における子ども自身の育ちを見通している。これらのことから子どもの自発的な遊びは子どもたちの育ちそのものであり、保育の中でとりわけ重要なものであると言える。

(2) 保育者の専門性

では保育の中で遊びを通した子どもたちの育ちを支えるための保育者の援助とはいったいどのようなものであるべきなのか。中山・小川(2011)^{vii}は自主性と自律性という遊びのもつ本質を捉えたうえで「保育の意図・願いを込めながらも、子ども自身が本来の遊びに向かうことができるような環境や状況の構成が求められる」と述べ、遊びの本質に基づいた保育者の援助の重要性を示している。小川(2000)^{viii}は保育者を人的な環境として捉え、保育者の存在や援助が子どもたちの遊びや育ちそのものに影響を与えているとしている。そうであるならば保育者の援助は常に意図的で有意義なものでなくてはならず、そこには保育者として子どもを援助する専門性が求められることとなる。佐伯(2007)^{ix}は保育者の専門性について専門的な知識や技術を身に付けるだけでなく、「かかわる子どもの立場にたち、一緒に考え、喜びや楽しみを分かち合い、時には悩みながらも解決方法や新たな発見を味わう姿勢が必要不可欠」だと述べている。これらから保育者が専門性を有して子どもに関わる大切さを示している。

(3) 遊び中心の保育の捉え

鯨岡(2009)^xは昨今の保育について、保育者主導の「させる保育」「見せる保育」と表している。子どもの心や活動や学びの過程ではなく、行動そのものやその結果に視点をおいたため、子どもたちを「できる・できない」という結果で捉えてしまうため、「できないところをできるようにするための『させる保育』が導かれ、保護者の喜ぶ『見せる保育』に傾斜する」と述べ、「子ども一人ひとり、子どもの心、活動の過程」に保育者が目を向けていないことを問題視している。

河邊(2005)^{xi}は、子どもが主体的にかかわって遊びに取り組むその過程には、多くに自己決定の機会があり、遊び中で考えたり判断したりしながら心身を存分に動かす姿が期待されるとし、それについて「まさに『生きる力』を身に付けていくプロセス」と述べている。そして遊びを中心とした保育について「単に子どもに自由な時間を与える保育ではない」とし、「保育者からの適切な援助を受けながら、自発的活動としての遊びを中心とした生活の中で、子どもが必要な経験を積み重ねていくことができる保育」と述べ、子どもの発達に即した保育であることを示している。以上より子どもにとって最適な保育内容や保育環境を考えた際、遊びを中心として、個々の子どもの興味関心を大切にした主体的な遊びや学びが、高い専門性を有する保育者の的確な援助によって促されることが重要で

あることが考えられる。

2. A 保育園の保育内容の転換

今回の研究協力園であるA保育園では、遊びの中での育ちを重要と捉え、子どもの自発的な学びを保障し、園全体の保育の質の向上、並びに子どもの育ちを支える保育者の専門性の向上も図っていくために2012年度より保育内容の見直しを行った。2012年度以前は年間の活動として鼓笛指導を取り入れ、地域行事や園内行事などでも発表を行っていた。また午前中の生活の中で「主活動」と呼ぶ一斉活動を行っていた。自由遊び時間は子どもたちが登園する8時から10時までと午睡後から降園時間までであったが、行事の準備や鼓笛の練習に充てられることもあった。転換後は自由遊びの時間と内容を見直し、子どもの自発的な遊びを保障できる環境と時間の確保を大切にして、午前中は8時から11時までにしたほか、年間活動として行っていた鼓笛指導を止め、さらに一斉活動の内容と時間帯も見直した。

3. 研究目的

本研究では、遊びを中心とした保育内容の変革により保育者の保育観がどのように変容したのかについて、そのプロセスを保育者の語りを基に明らかにする。

4. 研究方法

(1) 対象

研究協力者は新潟県内のA保育園に勤め、保育内容の転換を経験している勤続5年4か月から11年4か月の保育者4名と保育内容を変えた翌年に就職した勤続2年4か月の新任保育士1名の計5名を対象とした。

(2) インタビューの方法・手続き

半構造化面接法を用いてFGIを実施した。具体的な質問項目として、①従来の保育内容で保育を行っていた時に大切にしていたこと、②保育内容を変えた1年目と2年目の中で感じたこと、③現在、保育の中で大切にしていることについて、自分の考えや感じていたことなどについて具体的に語ってもらった。またインタビューは2015年7月に実施した。

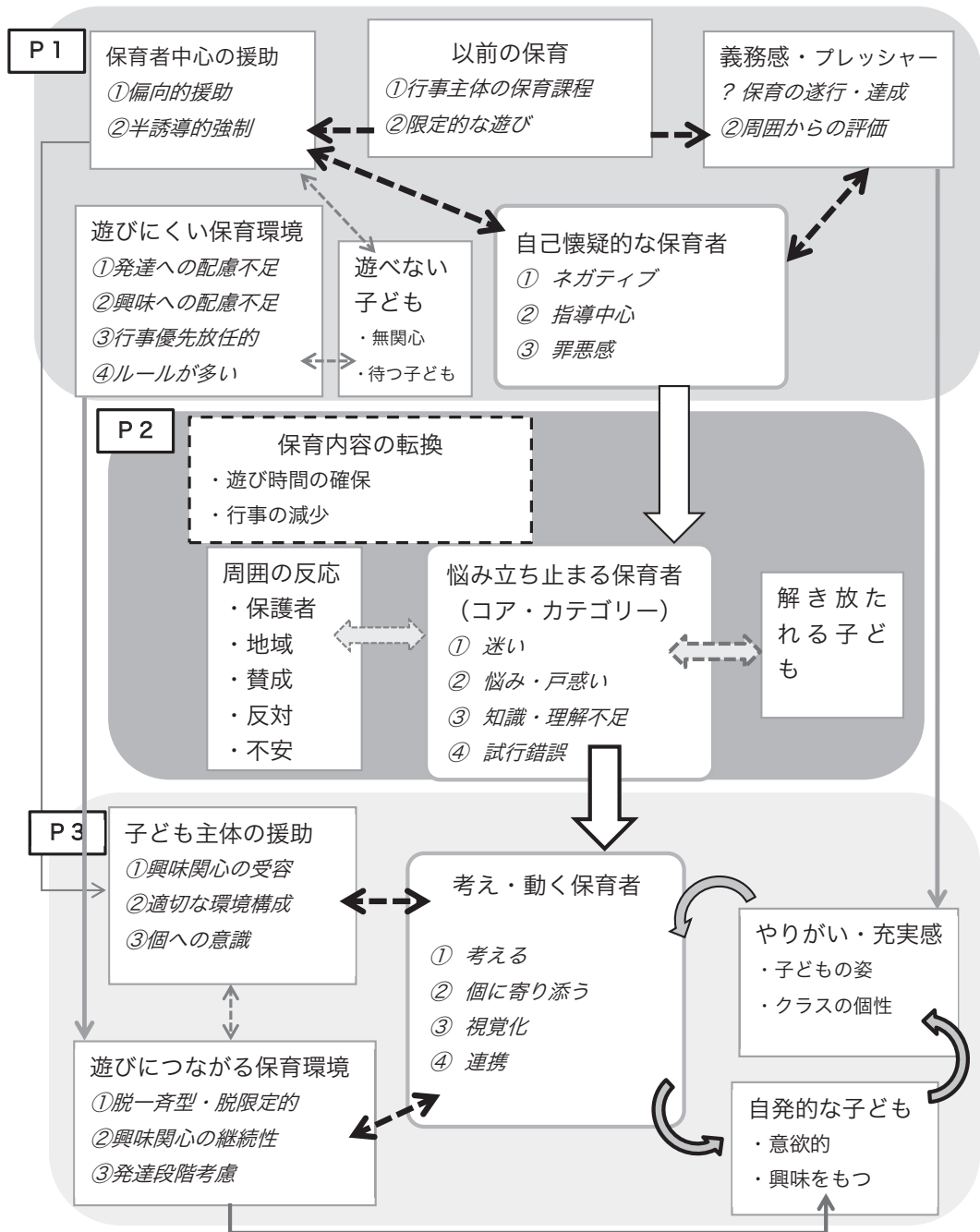
(3) 分析方法・手続き

戈木 (2006)^{xii}がシンボリック相互作用論の影響が強く「データに基づいて分析を進め、データから概念を抽出し、概念同士の関連づけによって、研究領域に密着した理論を生成する研究方法」であるとしていることから本研究におけるプロセスの理解においても有効であると判断し、ストラウス・コービン版のグラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) を採用した。分析の手続きは、①半構造化インタビューによって言語データを取得後、②保育者の保育観の変化の言語データを文脈ごとに切片化し、③切片化したデータからプロパティ、ディメンションを抽出し、ラベル付を行った。ラベルの再確認後、それらを基に概念の抽出度を高くして概念をまとめたり比較したりすることでカテゴリーを作成した (オープン・コーディング)。④それらを基にカテゴリーとサブカテゴリーを位置づけ、プロパティとディメンションによって関連付けて構成した (アクシャル・コーディング)。⑤最後にカテゴリー同士を関連付けて関連図を作成した。

5. 結果と考察

本研究では保育者の語りを基に保育内容の転換に伴う保育観の変容についてGTAを用いて分析することで、保育内容の転換前と現在の保育において保育観の変容が見られ、そのプロセスが明らかとなった。分析で得られた概念図をFigure1に示す。

Figure1 保育者の保育観の変容プロセスGTA概念図



言語データから、保育者の保育観の変容について、保育者は保育内容に伴って生じている保育環境や援助、子どもたちの姿から自身の保育観を形成していることが示された。行事中心の保育だったころでは、保育者自身の保育に向けての意識が低いことが示され、遊び中心の保育に変化していった中で、悩み立ち止まりながらも、子どもの姿を捉えることの重要性と、やりがいを感じていることが示された。

そこで、アクシャル・コーディングの段階で、【P1 以前の保育、自己懐疑的な保育者、保育者中心の援助、遊びにくい保育環境、遊べない子ども】、【P2 悩み立ち止まる保育者、周囲の反応、解き放たれる子ども】、そして【P3 考え・動く保育者、子ども主体の援助、遊びにつながる保育環境、自発的な子ども、やりがい・充実感】、の3つのパラダイムに分類した。次にこの3つのパラダイムごとに、その概観を説明する。

【P1 以前の保育、自己懐疑的な保育者、保育者中心の援助、遊びにくい保育環境、遊べない子ども】(以下P1)では、〈行事中心の保育〉を行っていた時、保育者は行事主体の保育課程の中で、達成に向けて保育を進めていくことや保護者からなどの評価に対して〈義務感・プレッシャー〉を感じていた。また行事の準備の合間を縫うような遊び時間のために、限定的な遊びの環境だったため、発達や子どもの興味への十分な配慮がなされずに〈遊びにくい保育環境〉が存在していた。それゆえ、〈遊ぶことができない子ども〉の姿があり、保育者も何とかしてその遊びに興味を向かわせようとする偏向的な〈保育者中心の援助〉を行っていた。そのような日々から保育者、行事を進めていくことに対して義務感を感じつつも、子どもたちの遊びや育ちに対して意識が低かったり、鼓笛などの指導中心の中で罪悪感をもったりしており、〈自己懐疑的な保育者〉の保育観が示された。

【P2 悩み立ち止まる保育者、周囲の反応、解き放たれる子ども】(以下P2)では、P1の保育内容と保育者の保育観から、保育内容の転換によって、遊び時間が確保され、行事が減少すると保育者は、これまでとは異なる遊びの環境に、〈解き放たれる子ども〉の姿に圧倒されたり、保育内容の転換について賛成や反対を含めた周囲の反応に対して、悩んだり、援助の方法に迷ったり、戸惑ったりし、試行錯誤を繰り返し、〈悩み立ち止まる保育者〉の姿がみられた。しかしこの心の揺れは遊び中心の保育への保育内容の変革について、保育観を変容させていく重要な時期であると考えることができ、コア・カテゴリーとした。

【P3 考え・動く保育者、子ども主体の援助、遊びにつながる保育環境、自発的な子ども、やりがい・充実感】(以下P3)ではP2で示された、悩み立ち止まって保育観の再構成をしていく姿の中で徐々に考え動き始める保育者の姿があり、新たな保育観が形成されていく様子が示された。遊び中心の保育内容のなかで、子どもの興味関心を受け止めながら、適切な保育環境を整えていくことで、〈子ども主体の援助〉を意識するようになり、発達段階を考慮しながら、脱一斉型・脱限定的な遊びの環境を整えたり、遊びが続いていくた

めの環境など〈遊びにつながる保育環境〉の構成を考えたりするようになっていった。それにより保育者はそれぞれの子どもの姿が視覚化され、より個に寄り添うことの重要性を考えたり、環境構成について保育者間で相談し、連携したりしようとする様子が示された。また遊び中心の保育環境の中で、意欲的で興味関心をもっていく〈自発的な子どもの姿〉が見られるようになり、その子どもの姿に対して、保育者自身の自己肯定感が高まり、保育に対してのやりがいや充実感を感じることができ、それが更なる自身の保育観をもつ自信となっていることも考えられた。

6. 総合考察

今回の研究では、GTAを用いて、遊び中心の保育への保育内容の転換によってそれぞれの保育内容が保育者の保育観に与える影響と保育観を変容させていく中で、経験した心の揺れなどについて、3つのパラダイムと14のカテゴリーに分けて示すことができた。遊び中心の保育内容の転換のなかで、従来の行事が主体の保育内容との中で、時間の使い方が変わったり、保育空間の環境構成が変わったりする中で、保育者はその時間や保育空間の中で過ごす子どもたちの姿に対して、認識を変容させている。従来は行事や一斉指導での保育を進めていくことに対しての義務感や達成やその評価に対するプレッシャーなどから、子どもの興味関心を十分に捉えた保育ではなく、それゆえに環境構成や援助についても保育者中心で考えられ、興味関心のない子ども存在や、遊べずに片付けなどを待っている子どもの存在も見られていた。そのような保育の中で、鼓笛指導に没頭したり、行事の準備や練習に対しての保育者の連携を取ったりしていることに対して、懐疑的であり、子どもに対しては罪悪感をもって、それらが保育観に影響しているように考えられた。

保育内容の変革を機に、これまでとは異なる環境や遊びの援助、自分の意欲で遊び始める子どもの姿に対して圧倒されたり、迷ったり悩んだりすることを経験し、さらに遊び中心の保育内容の転換に対して、保護者や地域からのさまざまな反応もあったことで保育者は自身の保育観に対して様々な角度から考える機会となったようであり、実際に子どもたちと過ごす中で試行錯誤をしながら関わっていくことで保育観が変容し始めていったと考えられる。

その時期を経験することで徐々に新たな保育観を形成することにつながり、子どもたちの姿に対してそれぞれの子どもの興味関心を受け止めながら、個に応じた援助を心掛けるようになったほか、遊びのもつ学びの大切さから発達段階を考えたり、翌日に遊びが続いていくことで遊び込んでいくことにつながる継続性にも意識を向けたりして保育を行っていることが窺えた。またそのような保育観を持つことは一人一人の子どもをよく観察し理解することにつながり、保育者間の幼児理解や環境構成の相談をして互いに連携すること

にもつながっていることが考えられ、さらに自発的に遊ぶ子どもたちの姿から保育者の自己肯定感が生まれ、さらなる保育観の研鑽へつながっていくことも示唆された。

今回の研究で示された保育観の変容のプロセスから、遊び中心への保育内容の変革は、行事や主活動の遂行のために画一的で限定的な保育環境の中での自己懐疑的な保育観から、悩み立ち止まり保育観の再構築する時期を経て、個に応じた援助や環境を考え実践しようとする保育観へ変容していくことが示された。保育者は保育内容に応じてその保育環境や援助の在り方、周囲の状況によって自身の保育に対する考え方を捉えていると考えることができる。一方、保育内容の変革による保育者の保育観は瞬時に再形成されるものではなく、これまでの保育内容と新しい保育内容のなかで保育者自身が悩み、試行錯誤していく中で形成されていくものであることが示唆され、従前の保育観と新しい保育観が形成されるまでの間の心の揺れ動きが生じていることが考えられた。

文 献

-
- i 文部科学省(2008) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
 - ii 厚生労働省編(2008) 保育所保育指針解説書 フレーベル館
 - iii 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2015) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館
 - iv 丸山良平・横山文樹・富田昌平(2003) 保育内容としての遊びと指導 建帛社 23-28
 - v 小田豊・中坪史典(2009) 幼児理解からはじめる保育幼児教育方法 建帛社 25-26
 - vi 鯨岡峻(2015) 保育の場で子どもの心をどのように育むのかー「接面」での心の動きをエピソードに綴るー ミネルヴァ書房 157-159
 - vii 中山昌樹・小川博久(2011) 遊び保育の実践 ななみ書房 7-14
 - viii 小川博久(2000) 保育援助論 生活ジャーナル 60-63
 - ix 佐伯胖(2007) 共感 育ち合う保育のなかで ミネルヴァ書房 109-111
 - x 鯨岡峻・鯨岡和子(2009) エピソード記述で保育を描く ミネルヴァ書房 1-15
 - xi 河邊貴子(2005) 遊びを中心とした保育 保育記録から読み解く「援助」と「展開」 萌文書林 11
 - xii 戈木グレイグヒル滋子(2006) グラウンデッド・セオリー・アプローチー理論を生み出すまでー新曜社 10